

文芸誌
白石すみほプラス ONE
平成28年3月 第15号

ふたり



H, Takahashi

勝又浩の

私小説千年史

藤田愛子



私小説千年史：勉誠出版

文芸評論家で法政大学名誉教授でもある勝又浩氏の「私小説千年史」が刊行されると、まるで百合のつぼみが花ひらいたように、四誌の新聞がいつせいに取りあげた。

ことに東京新聞では、大波小波で私小説の源流として要約し、三月十五日の日曜版では「日本語の特質として展開」という表題で歌人の水原紫苑が骨ぶとの評を書いている。

—— 壮大な志を持った書物である。私小説の源に日記そして短歌と俳句を位置づけ、日本語そのものの特質から、私小説が日本独自の文学であることを示そうとする。西洋近代の虚構の文学に対して、常に風下にいた私小説を、千年来の日本の（純文学）の座に返り咲かせようという試みなのだ。

日本には日記を文学として読む日記文学の伝統がある。ルノーの告白録の千年ほど前に、日本は「かげろう日記」を持った。

著者によると日記は、自伝文学の先駆けであり、和歌の伝統とも結びついている。それは体験を重視し、花鳥風月に思いを託す日本の随筆の特性にも通

じているというのだ。

歌をつくる心と日記を書く心は一体、あるいは歌と日記は一つ根から出た二つの枝なのだ。ではその歌は何故できあがったのかといえは、それが日本語に適った表現形式、様式だったからである。すべては日本語が犯人、原因、出発点なのだ。

ことに「私小説千年史」の庄巻は三章の（日本語としての「私」にあるのではないだろうか。日本語では相手や場面に応じて主語をつかいわけける。

「わたし」「僕」「俺」「自分」「それがし」「わがは」「みども」「拙者」「おのれ」「わらは」「わちき」古語、俗語、方言、謙称にいたっては数えてみると実に一一九種もあると言う。

『I』と『You』で会話を成り立たせる英語とちがって、日本人はその場に依りて相対的に言葉を選んできた。そういう自我が社会をつくってきた。

日本語の自称詞、一人称には固定したものがなく、時・所・相手に依りて、その関係性のなかでえらばれ使い分ける。このような一人称の融通無碍な性格から生まれたスタイルが俳句・連句なのだと言う。

フランスでも自然主義が爛熟期に達したときに、私小説の運動があらわれた。彼等がこの仕事のために「私」を研究して語らなかつたのは、彼等の「私」がその時すでに充分社会化した「私」であったからである。

と勝又氏は小林秀雄「私小説論」の一節をとりあげて、解説する。

日本の作家たちの「私」が「社会化」されていなかったがために「独特な私小説」を生みだし作り上げてしまったのだが、「社会化」できなかつた個人々人が未熟だったからというわけではない。個人の問題ではなくて、彼らが生きている時代「わが国の近代市民社会」そのものが未熟だったからだ、小林秀雄は言う。

—— 小林秀雄は私小説論の結末に「私小説は亡びたが、人々は「私」を征服したろうか。私小説はまた新しい形で現われて来るだろう」と書いた。

しかしこの予言は言われるように半分当たり半分は外れた。

戦後の私小説排斥の嵐の時代を経ても、私小説は

滅びず、したたかに生き残ってきた。そこから幾多の名作も生みだされてきたし、藤枝静男や、小島信夫のような異色な作家作品も出現してきた。

——人間の「誠実」さという一点においても、その内実は西洋と日本とは全く違うと、サイモン・メイは指摘したが、それは西洋と日本の質が、そして、そこから形成された「社会」の構造が違うからだというのが、ここで私の言いたいことである。

私小説という言葉から私たちが連想するのは、田山花袋の〈蒲団〉であり、志賀直哉の短篇なのだ。最近では〈苦役列車〉で芥川賞を受賞した西村賢太で、私小説作家の藤沢清造に恋いこがれ自らを「私小説書き」と限定した。

長い間私小説を研究し擁護してきた勝又浩氏が、西村賢太との対談で「私小説は精神の自爆テロ」と総括したのは当然とも言える。

ともかくこの学術書といつてもよい「私小説千年史」のなかで、私がつとも惹かれたのは「書くことへの自意識の始まり」辻潤と牧野信一の章である。牧野信一の〈父を売る子〉をとりあげた勝又氏の

意図に対して、私は涙が出るほど感謝してしまう。

〈父を売る子〉〈心象風景〉は現在、講談社文庫にはいつているが、今から七十五年まえに、私は牧野信一全集三巻（第一書房）により、牧野の作品と出逢った。ことに、〈泉岳寺付近〉〈ソライス〉という作品に到っては暗記するほど読み、ただちに模倣して、織田作之助の「大阪文学」に〈弟子〉という短篇を書いた。

小説を書くお手本として、牧野信一の文学性に心酔したのである。辻潤と牧野信一が方法的にもにした自意識の始まりが、やがて高見順、太宰治によって開花したといつても過言ではないだろう。

なぜ高見順と太宰治という作家がこれ程までに面白いのか。本質的に私小説作家であるからだと思う。勝又氏の言葉を借りれば、太宰治こそ「自意識の自爆テロ」にふさわしい戦後作家ではないだろうか。

二〇一五年六月七日、船堀タワーの二階蓬莱の間で勝又浩著「私小説千年史」について語り合う会が、「季刊遠近」の同人の方たちによってひらかれた。

八十二歳で「構想」に書いた〈雨の夜〉という私の作品が、文学界の同人雑誌評でとりあげられた。八十歳になる老女がライブにいつて若者といつしよに騒ぎまくるといふアブノーマルな短篇なのだ。

——私は知らなかったが作品もたくさんある人らしい。放埒のなかのわさびのような味には、やはり永い修練の時間が刻まれているのであろう。

放埒のなかのわさびのような味、わさび漬の好きな私は、ふつてわいたような勝又浩氏の好意的な批評に有頂天になってしまった。

何年もまえから死んだも同然の同人誌作家である私は、勝又浩氏の批評の言葉でとつぜん息をふきかえたのである。

『放埒のなかのわさびのような味』秋山駿さんも思いつかなかつたし、よい日本語の表現が、絶えず頭のなかに湧いてきて、それに押されるように十六作の短篇をつづった。

みすばらしい小説書きにとつて、謂わば恩人でもある。しかしお偉方となると、コッケイなほど萎縮してしまふ私は、遠近の会で二度もお目にかかつて

いるのに、お礼すら言っていない。礼儀の問題としても自分の行為は放つておけない気がする。

しかし逗子披露山から江戸川区といつても千葉県に近い船堀ともなると、まるで半日がかりの道筋なのだ。ありがたいことに遠近の北村幹子さんから、首都の交通網のかかれた地図を送つてもらつた。船堀にゆく新宿線は、總武線の馬喰町駅とつながっている。

横須賀線の東京駅のつぎが馬喰町駅とは知らなかつた。さすがに東京のJRは、こまかく地下鉄と連繫している。

九十三歳の私は、馬喰町のひろい地下道を、よたよたと切符売り場へと歩いていった。

船堀に着いたときは、すっかり陽も落ちてしまつていた。駅前のベンチに腰をおろし、遠くにきたものだとタワーホールの灯りをながめた。

タワーホール船堀の一階に足をふみいれると、北村さんに導かれてふだんは結婚式場である蓬莱の間にひそかにはいった。

あまりにも広い会場なので、参加している五十人

ぐらいのもの書きも、中央にしつらえた長いテーブルのまわりをあちこちで囲んでいた。

勝又先生が話をしていたが、入口近くの椅子に坐っている私にはよく聴きとれない。かなり離れているのと、マイクの調子が悪いせいだった。

マイクの調子がおおると、司会の難波田節子さんの声も心地よかったし、私小説千年史の感想とお祝いのべる、「季刊文科」の編集にたずさわっている老先生のお話も面白くつたわってきた。

やがて乾杯の音頭がとられ、テーブルの上には和洋中華の御馳走がならんだ。立食ともなると、私はなぜか進んで料理をとりわけける気にはならない。

やさしい友人が、お蕎麦とデザートを私のために運んできてくれた。慎重でうごかない私にはそれで充分だった。御馳走がはいると会場はたちまち賑やかになった。

招かれた人たちが、次つぎとスピーチに登場した。しかし御馳走で活力を得た仲間たちの話し声はそれよりも上をゆき、スピーチの内容はかき消されてしまふのだ。

遂に人生も終りに近づいた私の名が呼ばれた。

壇場にあがるまえに勝又先生が、文芸家協会編の〈文学二〇一五〉に季刊文科に書いた藤田さんの〈渴いた梢〉という作品がえらばれました。古井由吉の次に掲載されていると、特に古井由吉の次にえらばれている点をおどろいた風に報告された。

同人誌（老人誌）作家である私の作品が、大家といつてもよい内向の世代である古井由吉氏の次に名をつらねている。それは驚嘆に値することに違いはない。そこを指摘されると、文学価値というものは、誰しもおなじなんだと嬉しさがこみあげてきた。

壇場にあがった脊のひくい私は、マイクをとりあげ、持ってきたノートを開きそこに書かれた私小説千年史の感想をのべだした。しかし参加者たちの活力のある話し声には及ばず、たちまち泡沫のごとく消え去るのである。死にかけのおぼあさんのスピーチを仕方なく聴いているのは、勝又氏ただ独りだった。

壇場をおりると「え、九十三歳なの」という声が聴こえた。

参加者たちは自分の母親を想いうかべたに違いない。誰かが「藤田さんは九十三歳なのよ」と言った。

今の時代は年をとればとるほど嫌がられる。それほど老人がきらわれているからだ。

よたよた歩けば、ゴツイ年寄りの藤田さんと言われるだろう。私は脊すじをのぼすと、すたすたと歩いて坐席にもどった。

二次会は北村幹子さんの腕につかまって、小綺麗な料理店に行った。

勝又先生と北村さんのあいだに坐らされ、ようやくアイスクリームにありついた。勝又先生は遠近の江間徹さんと話もりあがっていた。

「江間さんは東大出で本田技研につとめてたの」と北村さんが言った。

「え、本田技研、和光の……」

私はびっくりして江間さんのおおを見た。そのあと北村さんは、三島由紀夫文学館長である作家の松本徹氏と談笑していた。私はすんなりと、季刊遠近さんの一員になったような気分になっていた。

「ピアニストの中村絃子の旦那は芥川賞の庄司、え、

なんといつたつ……」

と勝又先生が江間さんに聴いた。

「そう、庄司……」

江間さんもど忘れしたらしかった。

アイスクリームにありついてほっとした私は

「先生、庄司かおるです」と勝又氏に告げた。

「そうそう庄司薫ね」

勝又先生は嬉しそうにならずかれた。

放埒のなかのわさびの味と、私の作品を批評した評論家と席をおなじくしているのに、またもお札を言う機会をのがしていた。

（作家・逗子市在住）

注・勝又浩（かつまたひろし）一九三八年横浜市生

文芸評論家・著書「引用する精神」「作家たちの

往還」「鐘の鳴る丘」世代とアメリカ」

「私小説千年史」第28回和辻哲郎文化賞